

「嘉坡通信報知叢談」論

——メディアとしての小説——

はじめに

「叢報知叢談」は『郵便報知新聞』（報知社発行）¹紙上に一八八六年十月から一八八九年の年末にかけて掲載されていた小説のシリーズ連載を総称するタイトルである。一回完結のものから八十七回連載のものまで、二十九編の小説が、シリーズ全体の枠組を提示した初回を含めて、総計六百十八回掲載されている。一回分の字数には幅があるが、一段が二十三字×四十三行を基本とする文字組みで最も長い回は四段で四千字弱（一八八六年十月二日）、最も短いものは一段の半分の二十四行で五百字強（一八八八年十二月十五日）であり、実際はその中間の二段前後で二千字程度という回が多い。当時の『郵便報知新聞』は四面構成で、第一面が一番上に題字があるために四段、第二面が五段、第三面も五段だが四段目

・五段目は広告が入ることが多く、第四面はすべて広告が占めている²。つまり、全体で十二段ほどしかない本文部分のうちの四割から一割程度を小説に割いていたことになる。後年の新聞と比較すると小説の全体に占めている割合がずいぶん大きかったというのがわかるだろう。

ただ、それだけの分量を持っているにもかかわらず、「報知叢談」は従来の日本近代文学研究・日本近代文学史においてはそれほど注目されてきたわけではない。翻訳文学の歴史の中で³、また新聞小説の歴史の中で⁴、さらにそのほとんどを翻訳したと考えられる森田思軒について論じる中で⁵、その存在や意味が指摘されたことはある。しかし、外国の小説の翻訳であるがゆえに、またいまだ新聞に文芸欄も小説欄も存在しない時期に連載されていたがゆえに、日本の近代文学が本格的に始動する

栗原 丈和

前のもの、前近代的なものに見なされ認められてこなかったものである。

日本近代文学史において「報知叢談」が連載されていた時期は、坪内逍遙の「小説神髓」（一八八五～六年）および「当世書生気質」（一八八五～六年）による登場と、それに対して継承かつ批判的に現れた二葉亭四迷の「小説総論」（一八八六年）や「浮雲」（一八八七～九年）の先進性が強調される時期である。そこで提示された新しい文学の可能性が、いかに継承されていたか（またはいかに見失われていったか）が文学史・文学研究における問題の主軸となっていた。同時代に存在していた『郵便報知新聞』紙上の「報知叢談」やその他の新聞紙上における饗庭篁村や黒岩涙香たちの活躍などは、およそ文学の名に値しないもの、文学以前の存在として扱われてきたわけである。

しかし実際のところ、当時存在していた小説全体の中では坪内逍遙や二葉亭四迷の存在は、末流とまでは言えないにしても、いくつもある流れの一つにすぎなかったものであり、それを文学史の本流としてしまうのは一つの偏った価値観・文学観に基づいたことである。もちろん、従来の観点到代えて他の小説を本流として価値づけるの

であれば、同じようにあるイデオロギーをそこに発動させてしまうことになる。小説を論じる上で、ある価値観に従って評価や位置づけを行ってしまう事自体はなかなか避けにくいことなのだが、その評価を絶対視して小説ジャンルが持っている多様な側面・可能性を一部分に限定するようなことになってはならない。

本論では、まず「報知叢談」がどのような小説を掲載していたかを全体的に把握し、また『郵便報知新聞』紙上でのどのような機能を担っていたかの検討を通して、小説ジャンルが持つ、狭い意味での文学とは違う側面を明らかにすることを目指していく。

1 「嘉坡通信報知叢談」について

『郵便報知新聞』が小説を掲載するようになったのは、イギリスから帰国した龍溪矢野文雄が編集の中心になった一八八六年以降である。一八八六年九月十六日に「矢野文雄の意見を採用」したという「改良意見書」が掲載され、自由民権運動の凋落に伴う発行部数の低下の対策として、手に入りやすいように値段を下げる、わかりや

すい俗語を用いた上に使う文字の数を減らしました漢字にふりがなを付ける、「士君子」向けと「婦人」向けの二種の社説を載せるなど、いわゆる（大新聞）の枠を脱し、より多くの読者を獲得することを目指した「改良」がこれ以降目指される。そして、「改良意見書」そのものには含まれていなかったものの、「通信報知叢談」（以下「報知叢談」と略す）が掲載されるようになったのはその「改良」の流れの中にある。

「報知叢談」は翌月十月一日から掲載が開始される。現在の新聞小説のように毎日欠かさずということではなく、翻訳者の事情や他の記事との関連で時に断続的な掲載になることも多かったが、冒頭で述べたとおり以降小説は『郵便報知新聞』の紙面の中で大きな位置を占めるようになる。

「報知叢談」は原作者・訳者を異にする様々な長さの小説を集めた連載であり、「社員矢野の知人なる在シンガポール新嘉坡英人ジョセーブ、ママクラーク氏」から送られてくる「世界万国の人の持ち寄る物語」という大枠の設定を持っていた。紙面でも、その設定を活かして「徐ジョセーブ世、具羅氏第一回の通信ハ此にて畢りたれども明九日横浜入港の東西会社の郵船便にハ必ず其第二回通信到着すへき筈

に候へハ一兩日中にハ引ひきつゞつて種々の奇話を訳出致す様相成る積に御座候」（一八八六年十月八日）、「除世布氏の来状ハ一先つ此にて相切あひきれ候得共近々来着の郵船ゆうせん之れあり候故、今四五日の中にハ又新奇なる物語ものがたりを訳載することと相成り可申候」（一八八六年十一月七日）と、続きを待つ読者への言い訳がなされたりもしている。

もつとも、紙面改良から「報知異聞」開始までの時期、一八八六年九月十九日から二十四日まで「本紙ほんし上に一種の小説を相掲あひかげ」ることを告げる広告が六日続けて掲載されていた。「社友九名更かるく三四日読切りの小説を訳述し又ハ自作し匿名にて之を本紙上に載する事」という広告とすべてが一致している訳ではないものの、読者には「報知異聞」が予告されていた「小説」であることは明らかだっただろう。次第に紙面でも「小説」と呼ばれフィクションであることを隠さなくなっていくようになる。ただし広告の言う「世界万国の」「物語」を掲載するという主旨だけは最後まで貫かれている。まずは全体を把握するためにタイトル・紙面に記載された訳者名・連載期間（回数）と共に、この後の論点のためにどのような地域が舞台として選ばれているかを列挙しておこう。なお、地名のうち現在の表記が不明なものにつ

いては原文を引用している。

・「新嘉坡通信」

一八八六年十月一日

シンガポールから届いた手紙の紹介（「報知叢談」の外枠の提示）

○「志別土商人の物語」 天峯居士訳

一八八六年十月二日～八日（六回）

チベットの「約幹吐」

○「印度太子舍摩の物語」 笠山樵客訳

一八八六年十月十二日～二十日（八回）

インドの「モンデー」↓ジャワのバタビヤ↓南アフリ

カ・オレンジ河流域↓同・内地

○「志々利譚」 空々生訳

一八八六年十月二十九日～十一月七日（八回）

イタリアのシチリア

○「金驢譚」 不語軒主人訳

一八八七年一月十八日～二月二日（十四回）

ギリシア

○「英国士官の物語」

一八八七年三月一日～三日（三回）

イギリスのロンドン

○「仏、曼、二学士の譚」 紅芍園主人訳

一八八七年三月二十六日～五月十日（三十九回）

イギリスのブライトン↓アメリカのオレゴン川流域↓

ロッキーマウンテンの麓↓サンフランシスコ↓ロッキーマウン

テンの麓↓オレゴン河流域

○「天外異譚」 大塊生訳

一八八七年五月二十六日～七月二十三日（五十一回）

仏領アルジェリア「モスクガナム府」↓大地ごと彗星

の上↓アルジェリア

○「貧福」 薔薇園主人訳

一八八七年八月六日～十二日（六回）

スペインのグラナダ

○「煙波の裏」 獨醒子訳

一八八七年八月二十六日～九月十四日（十七回）

イギリス・スコットランドのグラスゴー↓大西洋航路

の船上↓アメリカ・チャールストン↓グラスゴー

○「盲目使者」 羊角山人訳

一八八七年九月十六日～十二月三十日（八十七回）

ロシアのモスクワ↓トルキスタン↓シベリア↓イルク

ーツク

○「夢中夢」 覺後庵主訳

一八八八年一月二日～二十五日（二十回）

イギリスのロンドン→ケント州ダートフォード→ダービー→パリ

○「大氷塊」 静廬外史訳

一八八八年二月七日～四月十八日（五十九回）

北アメリカ「レライアンス鎮」→北極圏・バサースト島

○「幻影」 笠峯居士訳

一八八八年四月二十七日～七月十九日（七十一回）

イギリスのロンドン→イタリアのトリノ→ロンドン→ロシアのサンクトペテルブルグ→モスクワ→イルクーツク→イギリスのデボンシャー地方→フランスのパリ

○「定数」 蕉陰散史訳

一八八八年七月三十一日～八月二十二日（二十回）

イギリスのリバプールからアメリカのニューヨークに向かう大西洋航路の船中

○「炭坑秘事」 紅芍園主人訳

一八八八年九月四日～十月二十八日（四十五回）

イギリス・スコットランドのエディンバラ→「アバーホイル石炭山」

○「女旅客」 臥禅居士訳

一八八八年十一月二十五日～二十八日（三回）

フランス「ヂューネ」

○「右足」 臥禅居士訳

一八八八年十一月二十九日～三十日（二回）

フランスのカレー

○「密封書」 臥禅居士訳

一八八八年十二月一日～四日（三回）

フランスから南アメリカ「カエーン」への航路上の船中

○「元日」 臥禅居士訳

一八八八年十二月八日～十一日（三回）

イギリスのある村

○「猫」 臥禅居士訳

一八八八年十二月十二日～十五日（四回）

イギリスのロンドン

○「倫敦辻馬車」 臥禅居士訳

一八八八年十二月十八日～二十三日（四回）

○「時計獄」 臥禅居士訳

一八八八年十二月二十五日～二十七日（三回）

イギリスのロンドン郊外の田舎

○「探征隊」 西澹生

一八八九年一月二日～三月三十日（五十一回）

イギリス・スコットランド↓大西洋上の船旅↓南アメ

リカ（チリ↓アルゼンチン）

○「代言人」 臥禅居士訳

一八八九年四月三十日～五月二日（三回）

イギリス

○「狼 声」 臥禅居士訳

一八八九年五月四日～八日（三回）

アメリカ

○「一大奇術」 臥禅居士訳

一八八九年五月十一日（一回）

イギリス・スコットランドのグラスゴー

○「まちがひ」 臥禅居士訳

一八八九年五月二十三日～二十四日（二回）

イギリス

○「是はソモ」 臥禅居士訳

一八八九年五月二十五日～二十六日（二回）

イギリスのロンドン

○「月 珠」 省庵居士

一八八九年六月二十八日～十一月十日（七十九回）

（インド）↓イギリスのヨークシャー地方

「報知叢談」の形式上の共通点としては、原作者名の記載がなく、訳者名の記載はあるものの、先に引いた広告に「匿名」とあったように訳者の使い慣れた筆名が用いられておらず、実際は誰であるのか同定が困難であるということがある。「報知叢談」が連載されている期間の『郵便報知新聞』には他にも翻訳小説が掲載されているのだが、それらは原作者名が記されていたり、訳者名が無かったり、逆によく知られた筆名が当てられていたりして、「報知叢談」とは違う形式を取っている。

「新嘉坡」からの「通信」という設定上、作者があるのは不自然であるし、また特定の訳者を意識させず『郵便報知新聞』全体でこのシリーズを引き受けているという印象を与えようとしているのではないかと考えられる。

結果として、「報知叢談」中の小説にはいまだに原作者や訳者が不明なままのものがある。もちろん、批評家・研究者の後年の調査によって複数の小説が掲載されていることが明らかになっているジュール・ヴェルヌのよくな作家もいるのだが、解明の糸口を見つけることが

難しい短篇も多い。また、訳者についても後に「翻訳王」と呼ばれるようになった報知社社員である森田思軒が長く関わっていることは推測できるのだが、詳細にどれが誰の訳になるものかはわかっていない。中には単行本になった際に訳者の本名が付されたり^三、後の回想で訳者が名指されているために訳者が同定されているものもあるが、それらの情報も確実とは言い切れない。

たとえば、一八八八年の半ばに連載されていた「幻影」である。これは、森田思軒と同じ報知社社員であり彼の弟子筋にあたる遅塚麗水の回想の中で森田思軒が翻訳したものの一つに数えられているし^三、柳田泉も「これも文章が全く思軒調である」と述べ^三、かつ「幻影」が未刊行の「思軒全集」の材料の中に含まれていることを指摘している^{三〇}。それらの証言・研究に基づいてか昭和女子大学近代文学研究室による森田思軒の著作リストでも「幻影」を彼の著作として扱っている^{三〇}。しかし、実際に当時の『郵便報知新聞』の紙面を見ると森田思軒の訳とすることはいくらかの疑いが生じてくる。

「幻影」の一八八八年六月十九日掲載分には「ニヅニ一府は原名ニヅニ一府と呼ぶ」という訳注がある。「羊

角山人」とは「盲目使者」の訳者のことだが、この記述は「幻影」の訳者である笠峯居士と羊角山人すなわち森田思軒（この点については注10を参照）とが別人であることを示しているように読み取れる。もつとも様々な訳者が翻訳するという当初の設定に則って、実際は自身自身が使った他の筆名をあたかも他人であるかのようなふりをしたという可能性もあるわけだが。

また、「幻影」が連載されていた時期、森田思軒は九鬼隆一、フェノロサ、岡倉天心たちの関西での古美術調査（法隆寺夢殿の救世観音像の「発見」で知られる）に特派員として同行し^三、取材に基づいた署名記事を書いてもいる^{三〇}。また署名はないものの、フェノロサの「奈良の諸君に告ぐ」という講演の記事^三や奈良県での調査の終了を伝える記事^三も森田思軒の手になるものと考えられ、はたして調査団に同行しつつ並行して小説の翻訳作業を行うことが出来ていたのか疑問が残る。もちろん、出発前に予め訳し終えていた原稿を分けて掲載していたという可能性もあるので、これもあくまでも疑問の域を出ないのだが。

原作・原作者の方に話を戻すと、多くの小説でそれらが明らかになっていないのは、現在では読まれなくなっ

た小説家のものが多いためではないかと推測できる。同

じく「幻影」を例にあげると、これまで原作者も原作も明らかになっていなかったこの小説のストーリーは、小森健太郎『英文学の地下水脈』²⁹で紹介されているヒュー・コンウェー Hugh Conway の「CALLED BACK」（一八八四年）のあらずじと一致し、「幻影」がこの小説の翻訳であることが明らかになった。同書によれば「黒岩涙香の、初めての探偵ものの翻案である『法廷（法廷）の美人』」³⁰の原作者であるコンウェーは「19世紀末の英国文壇に彗星のごとく登場し、短期間で圧倒的な人気を博しながら、（中略）死後は主流文学史でも、探偵小説史でも顧みられることの少ない作家」だという³¹。コンウェーほどの人気作家ではないとしても、当時比較的多くの読者を獲得していた作家を原作者とする小説が翻訳に際して選ばれ、しかしその作家が死後（または生前にも）顧みられなくなってしまう可能性は高い。黒岩涙香は「廉価な読み捨て本」であり、また「貸本の主力読み物」として「一世を風靡した」「シーサイド・ライブラリ」という叢書から翻案の原本を見つけ出していた可能性があるということだが³²、『郵便報知新聞』の翻訳小説も同じようなところから題材を選んでいたのかもし

れない。

以上のような原作者・原作・訳者が不明なものが多い状況では、個人の表現としての文学という枠組み・「近代文学」観の中では「報知叢談」のシリーズを評価しにくかったのも当然と言える。原作者・原作・訳者の同定についての作業は続けていく必要があるのだが、どのような個人が「報知叢談」にかかわっていたかということはこの後本論では問題にしない。「報知叢談」が『郵便報知新聞』という新聞メディアの一部分としてどのような機能していたかを問題にすることを目指しているからである。

2 紙面との連携

一八八八年の九月・十月に連載された「炭坑秘事」について柳田泉は「原作はジュール・ヴェルヌの『洞窟の子』(The Child of the Cavern)」というものだが、炭坑の二字を標出したのは、事実炭坑の怪事を語るからでもあるが、折柄高島炭坑の坑夫問題が喧しく論議され始めていたから、それを狙った点がある」と述べている³³。確か

に「炭坑秘事」連載前の『郵便報知新聞』の紙面には当時話題となっていた長崎の三菱高島炭坑における労働者の雇用状況問題の記事が掲載され、特派員を派遣したことが社告で告げられている。また、「炭坑秘事」連載開始後も、同じ第一面に小説と高島炭坑関連の社説が掲載されたりもしている。小説に対する読者の関心を「狙った」というだけではなく、近代になって日本に登場した炭坑という目新しい施設・空間についての知識を読者に与えるという機能も期待されていたと考えられる。

ただ、一八九〇年初頭の連載小説矢野龍溪「報知異聞」との関係について以前論じたように、『郵便報知新聞』ではこのような小説の題材と記事との関連は「炭坑秘事」に限ったことではなく、「報知叢談」の他の小説に関してもいくつかの例をあげることができる。新聞自体の頁数が少なく、また小説欄が特別に設けられているわけではなく一回分の小説の掲載字数が固定されていなかった当時においては、現在よりも小説が新聞全体と連携するところが大きかったわけである。

『郵便報知新聞』は海外・国内を問わず広く科学に関する記事を一貫して掲載しており、たとえば彗星の接近

・皆既日蝕といった天文イベントについては事前・事後に詳しい情報を伝えるのが通例だった。そのような情報と連動する形で「報知叢談」においては、地球に異常接近した彗星にアルジェリアの大地ごと乗り移ってしまった人々を描く「天外異譚」や、北極圏まで皆既日食の観測に赴くグリニッジ天文台の天文学者が登場する「大氷塊」が含まれている。どちらも彗星や日食に関する科学知識を小説のストーリーと連動させつつ紹介し、彗星や日食の観測記事だけでは得られない知識を読者に提供している。

他にもスペインのバルセロナで一八八七年九月から開催予定だった万国博覧会の記事を複数回掲載した後、スペインを舞台とした「貧福」を連載するといった例をいくつかあげられるのだが、複数の小説を貫いているという点で注目されるのはロシアに関連する事象である。帝政打倒を目指す革命家が登場するものがあり、また登場人物が遠くシベリアまで赴くものもある。前者にはロシア皇帝の暗殺を謀って流刑になる革命家が事件の秘密を握っている「幻影」、ニューヨークに向かう船上での殺人がロシア虚無党による皇帝の暗殺未遂事件を背景に持つ「定数」がある。また後者の一つである「幻影」で

は真相を知る革命家に会うために主人公がシベリアの流刑地を訪ね、「盲目使者」では皇帝の密命を受けた主人公が反乱軍が支配するシベリアを彷徨する姿が描かれる。

ロシアについての関心は、他の欧米列強の動向と同様に『郵便報知新聞』では一貫して強くあるのだが、それに加えて国境を接する隣国として特に重要視されていたことが伺える³⁰⁰。また、「盲目使者」が連載されていた時期には、アフガニスタンの内乱に端を発するアジア中央地域の混乱とそれに乗じたロシア・イギリスの動きを伝える社説が小説と同一面に掲載されたりもしていた³⁰¹。この後一九一八年に「シベリア出兵」として実現してしまうわけだが、仮想敵であるロシア相手の戦場として当時の日本でシベリアが意識されていたと考えるのは不自然ではないだろう。実際の紙面に対露戦争の影を読み取ることはさすがにまだできないが、当時の世界をリードする国であるイギリスが最も多く舞台になり、イギリス人を主人公とする小説が多いのは当然のこととして、その次にロシア関連の小説が多いのは、以上の点から理解できる。

また、革命家・ロシアの虚無党が選択されたのは、宮

崎夢柳「雑誌鬼啾啾」（一八八五〜六年）のような政治小説の影響が考えられるし、ロシア皇帝など欧米列強の指導者を狙った暗殺未遂事件についての記事があることからすると³⁰²、その存在自体に注目していたのだろう。しかし、同時に国内の問題として一八八五年に起きたいわゆる大坂事件との関連も想定できる。一八八六年から一八八八年にかけて大井憲太郎を始めとする関係者の審判が進み、『郵便報知新聞』紙上でも裁判の様や上告についての情報が掲載されていた³⁰³。他にも、朝鮮から亡命していた金玉均の動向を随時報道するなど³⁰⁴、やはり〈小新聞〉系の新聞とは一線を画している³⁰⁵。一八八六年の「紙面改良」は、発行部数の低下の対策として、〈大新聞〉すなわち立憲改進黨系の政党機関紙であることからの脱皮を図ったものでもあったのだが、政治的な事件への関心までは放棄していないということが紙面からうかがえる。

そのような「改良」前との継続性を持ちつつ、しかし紙面の「改良」の方針に則ってより広い読者を得ようとしている『郵便報知新聞』紙上で「報知叢談」が提示していた情報はどのようなものだったのだろうか。

3 「世界万国」の知識

「報知叢談」は、分量やストーリーから見ても、それが世界各地を舞台にした短い奇談のようなものと、登場人物がやむを得ない事情で長距離を移動する長篇冒険小説の二つに分けることができる。おそらく様々な作者の小説が選ばれているために、ストーリーについては特に共通性はないのだが、舞台になった地域の地理的・歴史的・風俗的な情報を含むものが多い点が注目される。たとえば最初の掲載作である「志別士商人の物語」の初回には以下のような記述がある。

昔し我か英雄元吉大可汗が西ハ歐洲西部を侵略し南ハ印度全地を切り取り東ハ支那全地を服従して古今未曾有の一大帝国を立てたりしことハ世人の知る所なるが此大可汗の薨するに臨み遺詔して其三子に此大帝國を三分し玉ひ其の第三子をして南ハ印度全地より北志別士に至る迄を統治せしめられしが此第三子は其名を亜利阿合麻と呼ひ治下の民は尊称して之を南方の大可汗と敬ひけり（一八八六年十月二日）

この「物語」は引用文中の「南方の大可汗」が主人公の一人なので、彼についての説明があるのは当然ではあるのだが（ただしストーリー上はこの説明は無くてもよい）、以上の記述が読者に海外の歴史についての情報を与えることになっているのも確かである。チンギス・ハンの死後、彼の築き上げた「帝国」が分裂していったことは、現在では高校の世界史でも学ぶ常識であるが、当時の日本においては誰もが知っている知識ではなかっただろう。続いて掲載された「印度太子舎摩の物語」は同時代のアジアとアフリカを舞台にしているが、その中では語り手・主人公の命運と共にイギリスによるインド侵略や、オランダによるジャワ島バタビヤの植民地化が語られ、さらにはアフリカでの彼の遭難体験を伝える中で「南ア非利加オレンヂ河の辺」の民族・動植物の様子などが伝えられている。このような記述は以後の「報知叢談」の小説の中でも繰り返されていく。原文だけではなく、訳者による注釈が付くこともあり、中には以下のように原文の解説に訳者の注釈が重ねられることさえある。

(前略) 蘇朗笏は一方の隅に累なれる丸き物を探りつゝ、「コハ何物なる歟」仁羅は熟視して「革袋なり、数は六七個もあるへし」蘇朗笏「中に何か盛りある歟」仁羅「然り、皆なコーミスの盛りあるなり、コハ善き物を見出せり我々ハ復た暫時の間新食物にアリツキたり」

『コーミス』は駱駝の乳汁以て製せる一種の酒の類にして能く人を酔ハしめ又餓を忘れしむるの力あり去れは今ま到る処無人の野を旅行する仁羅及び同行にハ頗る大切なる獲にてありしなり

訳者嘗て亜刺亜の亜丁に遊へる時同地の人民か多く革袋に水を盛りて之を駱駝に負はしめ来往するを見たりき蓋し同地ハ世人の知る如く水乏しく飲料には唯た雨水を蓄へて之を用ふるものなれば其の大溜より隔りたる諸処に水を運ふか為め斯く革袋を用ふるなり途上にて行違ひさまに目撃せる者なれば詳らかに視ることも得ざりしか革袋は能く水を盛りて少しも漏れ出つることなく一滴のシタ、リだに落とさずして運び居りたり革袋に飲料を盛ることは国々に困りて珍らしからぬ事なり(一八八七年十二月八日)

「盲目使者」の主人公蘇朗笏たちの一行がシベリアを移動中クラスノヤルスク郊外の空き家で革袋に入った飲み物を手に入れた場面だが、まず原文で「コーミス」という飲み物についての説明がなされ、さらに革袋に飲料を入れるという日本では行われていない風俗について自分の経験に基づいて訳者が注釈を付している。「盲目使者」は注9にあるようにジュール・ヴェルヌの小説の翻訳なのだが、彼の小説にシリーズ名として冠された『驚異の旅』というタイトルは、「地球の全表面を小説の形で描写するという壮大な連作」という構想を意味していた。そのため作中では登場人物の冒険だけではなく、彼らが赴く土地の地理・植生・風俗などについての解説に紙数が割かれていることが多く、この引用個所の「コーミス」についての解説もその一つである。『驚異の旅』と同じく、「世界万国の」「物語」を集める「報知叢談」も、小説を通して世界の各地を描写し海外の情報が読者に伝えられていたということを指摘したい。そう考えると世界各地を舞台とし、登場人物が長距離を移動するヴェルヌの小説が「報知叢談」の中で多く選ばれているのは当然のこととも言える。

『郵便報知新聞』は（大新聞）を起源にしているために、「紙面改良」後も通常の殺人や強盗などの犯罪記事やゴシップ記事が紙面に掲載されることはなかった。紙面を占めるのは日本国内の官報や取材に基づいた官庁・軍隊や社会的事件の裁判についての記事と、ほぼ同じ割合で海外の情報、特に欧米列強の国家間の対立やアジア・アフリカなどでの植民地活動についての記事である。そして、海外の情報に関しては、時事的な記事だけでは伝えられない植物・動物についての知識、各地の民俗・風習など日常生活に關した情報が連載の形で掲載されていた。

たとえば「紙面改良」から「報知叢談」開始の間には「英国より亜米利加大陸を経て帰朝した」思軒塾客（森田思軒）が自身の体験のうち「後の旅する人の心得の端ともなるへき処」をつづつた「回航記要」が連載されていた。また、同じ一八八六年九月十六日から、こちらは「報知叢談」掲載後も並行して連載が続いていくのだが、「今日の日本人に就て西洋の事物に味らき最も重もなる関点」である「風儀習俗の細事」の「一端を知らしむる」ことを目的とする「西洋風俗記」（署名は「西瀝

生）の連載も始まる。こちらの連載は一八八七年八月七日まで一年近く断続的に続いていくが、当初は「報知叢談」と同日にも掲載されていたものの、後半では「報知叢談」が掲載されていない間の海外情報紹介を肩がわりするような役割を果すようになる。②。「西洋風俗記」ではたとえば「西洋にて衣服、帽子、靴杯の様子ハ如何に候や其着様格好ハ如何に候や」という「問」がまず提示され、それに対する回答という形で「西洋」の「風俗」が明らかにされていく。③。単発的な質問がなされるのではなく、「芝居」についての「問」が継続的に行われ、「西洋」の演劇の状況が紹介されていたりもする。④。『郵便報知新聞』を定期的に購読していた読者は、一年弱の間に様々な「西洋」の「風儀習俗の細事」についての知識を蓄積していったことだろう。

紙数の関係で一八八九年までの期間に掲載された、吉田嘉六の「回航記略」⑤や「英国作法心得」（署名無し）⑥といった他の海外情報の連載の詳細についてふれる余裕はないが、読者に「風儀習俗の細事」について伝えるということとは『郵便報知新聞』における一貫した目的となつている。かつて論じたとおり、矢野龍溪「報知異聞」（同年単行本化された際に『異報知浮城物語』と改題される）

は、政治的・経済的に注目されつつも当時の日本では未知の土地であった〈南洋〉を舞台とすることで、海外への関心が乏しい読者に知識を与える役割が与えられていた³⁰。いわば同時代の情報の隙間を埋める小説^{メデイア}として紙面で機能していたわけである。

「報知異聞」のような一方向のまとまりを持った情報を伝えることはないものの、「報知叢談」掲載時期の紙面では小説を含めた様々な記事が読者を広い「世界」へと導いていたわけである。それは「広大無辺なる小説界」³¹が持つている、以前論じた「小説のエンサイクロペディアとしての可能性」³²を開いていくことにもなっている。

ただ、他の連載記事と「報知叢談」との違いとしては、前者がイギリスを中心とした欧米列強の情報を伝えるものであるのに対して、後者はより広い地域の情報を含んでいるということがある。では、登場人物が彷徨いこんでいく様々な土地の情報に関連して、読者は何を読み取ることが可能だったのだろうか。

4 冒険がかいま見せるもの

「報知叢談」のうち、連載回数のない短篇は一つの地域内にストーリーが収まることが多く、最大の先進国イギリスの首都ロンドンを舞台とした小説が多い。一方の長篇の方では、長い距離を移動しつつ登場人物は自らの所属する国や組織からの保護を受けられない状態に陥る。その際には、個人が普段は意識していないものの、実際には国家によって保護されているという事実が浮き彫りにされる。

以前、日本の近代初期における政治小説の機能として「難民・亡命者」といった「国家との関係を失った人々を描く」ことで「彼らが失った国家と国民の間の関係を浮き彫り」にすることを指摘した³³。「報知叢談」は政治小説の全盛期（憲法発布・国会開設の直前の時期）と重なってはいるものの、そこに含まれている小説は直接政治的な思想・知識を宣伝・啓蒙するものではない。前々節で取り上げた革命家の登場する小説も、彼らを肯定的に描くものが選ばれているわけではない。その点は、紙面の「改良」が目指した購読者数を増やすために政党色を薄めるという方向を反映しているのだろうが、だからといって全く政治性をはらんでいないということには

ならない。「報知叢談」の長篇小説の多くは先程述べたように、身分を保証される境遇から離され存在の危機を迎える者たちが登場し、その有り様は政治小説と共通するものである。

たとえば、先述の通り「天外異譚」の登場人物たちは土地・空気ごと地球を離れ彗星上に身を置くことになるし、「盲目使者」の主人公は皇帝の密使としての身分を隠しながら反乱軍が支配する地域を彷徨する。他にも「仏、曼、二学士の譚」は同じく身分を隠し情報を得るべく敵側の陣営に入りこんだ青年を主人公とし、「大氷塊」の登場人物たちはどの勢力にも属さない北極圏の浮島に孤立・漂流し、「炭坑秘事」において炭坑の中は外界の秩序が通用しない場所として描かれ、「探征隊」の一行は文面が一部しか読み取れない文書を頼りに少女・少年と共に父親であるグラント船長の行方を求めて南米奥地を横断していく。また、短篇ではあるが、「印度太子舎摩の物語」は祖国を追われた王子が行き着いたアフリカで奴隷として売買されるところを危うく逃れるというストーリーである。

もちろん、冒険小説として見るなら登場人物が危難に遭わなければストーリーが成り立たないのであり、彼ら

が置かれている境遇は至極当然のものということになる。また「世界万国」の知識を広めるためには舞台が一個所にとどまっているよりも、登場人物の行動・移動に伴って舞台が変わっていく小説を選ぶ方が都合がいいということもある。

ただ、日本の外の地域を題材・舞台にする際、すべての地域を網羅的に取り上げることが実際には困難である以上、そこには何らかの取捨選択が行われざるを得ない（「報知叢談」は翻訳なので選択の範囲は自ずから限られることになるが）。当時の日本において世界は一樣に見られていたわけではなく、大きく分けるなら「文明開化」の「西洋」と、文明が開化するに至っていないそれ以外の地域という分け方がされていた。海外についての情報を伝えるということであれば、「西洋」がいかに「開化」しているか、「開化」がもたらす利益はどのようなものなのかを伝えることが優先されるだろう。実際、前節で紹介したように、改良後の『郵便報知新聞』の海外情報を伝える連載記事は「西洋」についてのもので占められていた。「西洋風俗記」でも「風儀習俗の細事」について知ることが重要なのは、それが「政治なり法律なりの由りて生しょうする処ところの原素げんそとなるもの」だからである

という理由を付けている⁴⁶。ところが小説では対照的に「西洋」を舞台にしない小説が多く含まれているのである。

冒険小説では普段は社会の中でルールを守ることが求められる代りにルールによって保護されている人間が、ルールで保護されることもなくまた守ることを求められない、彼らにとつての辺境に追いやられた状態が描かれる。ここでいう辺境とは実際に地理的に隔絶した場所である必要はない。今言ったような社会の保護から切り離された状態にありさえすればいい。政治小説のうちの多くは以上のような冒険小説的な要素を含み、辺境に置かれることが「国民」としての自らの存在が問われることにつながる。本来あるはずの土地から切り離されることで、「国家」によって生を管理＝保護されている「国民」としての自己が確認される。それは自らを「国民」として創造・想像するということでもある。そこに前近代的で評価されがちな政治小説がはらむ近代性がある。

「報知叢談」の冒険小説をそのような「国家」、「想像の共同体」の生成と結びつけることも不可能ではないだろう。世界についての知識を得るということ自体、自分自身が世界に対してどのような位置にいるかというこ

とを意識することにつながるし、中には国家から切り離された登場人物たちに感情移入したり、自分の回りにあるのとは全く異なる自然・風俗・習慣といった文化の存在を教えられることを通して、自らが日本の国民として（保護されて）あること、かつ他にはない日本文化の中に生きていることを確認する読者がいたとしても不自然ではない。ただ、本論では「国民」を生成することも小説ジャンルが可能性として持ちうる機能であるという程度のおさえ方にとどめておく。

一方で、社会のルール・制度との間の齟齬、そこから来る葛藤を描くことを狭義の近代文学の特質とするなら、そのような社会からの葛藤を始めから放棄した冒険小説はなるほど近代文学とは呼びにくいだろう。しかし、ルールの外に登場人物を置くのも、ルールの中での葛藤に登場人物を直面させるにせよ、ルールによって人間を保護しかつ管理する制度の存在を読者に意識させることには違いはない。必ずしも社会と個人との関係、個人の表白し得ない内面といったものだけが近代性を代表するわけではない。個人の葛藤や内面も小説が情報として伝える「世界万国」の「風儀習俗ふうぎしゅうぞくの細事」の一つにすぎないのである。

「報知叢談」について、本論では『郵便報知新聞』の紙面の中だけで検討してきたが、さらに同時期の他の新聞に掲載されていた新聞小説との比較をすることで、その小説としての特徴がより明確になるだろう。そのためには元々〈小新聞〉の系統を受け継ぐ、つまり小説やその原型となる〈実録物〉へつづきものを以前から掲載していた新聞と比較する必要があるだろう。この時期、たとえば『讀賣新聞』のように以前から掲載していた小説の系列に加えて、坪内逍遙・尾崎紅葉といった新しい人材を導入することでそれまでと異なる小説を取り入れようとしている新聞もあり、当時の読者階層のとらえ方で言えば下向きの変革をしている新聞と上向きの変革をしている新聞が共存している状態があったわけである。その両方の向きが交錯するところに「近代文学」の場所が作り出されていき、そこからはみ出したものたちは「文学」ではないものとして排除されていくことになるのだが、その点については視野を広げつつさらに別の機会に論じていくことにしたい。

注

- 1 『郵便報知新聞』については柏書房刊の復刻版を使用した。本論の中で年月日まで記した引用はすべて『郵便報知新聞』からのものである。なお旧漢字は新漢字にあらためたが、人名などの表記のゆれについては原文のままに引用した。
- 2 やはりそれだけの紙面では不十分なこともあったようで、不定期に二面か四面の「附録」が付くこともあった。
- 3 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』春秋社、一九六一年、など。
- 4 高木健夫『新聞小説史稿』第一巻、三友社、一九六四年、田康雄『新聞小説の誕生』平凡社、一九九八年、など。
- 5 手塚昌行「泉鏡花と森田思軒」『国文学研究』28、一九六三年、藤井淑禎「森田思軒の出發——「瀛報知叢談」試論——」『国語と国文学』54巻4号、一九七七年、など。他に『報知叢談』の一篇「金驢きんろものがたり譚」が泉鏡花「高野聖」（一九〇〇年）に与えた影響を論じた、倉知恒夫「西洋近代小説の日本的翻案——森田思軒と泉鏡花」『講座比較文学第4巻 近代日本の思想と芸術Ⅱ』東京大学出版会、一九七四年、がある。
- 6 「新嘉坡通信」一八八六年十月一日。
- 7 たとえば一八八七年一月十六日に掲載された社告では「小説掲載方の事」という言い方がされている。

8 「年始芝居 維珍頓及び飼猫」一八八七年一月二日〜五日（三

がある。

回）、「年始芝居 四十の山賊」、「西文小品 旅館の夕」思軒居士（次の「幽霊新郎」の外枠の話）一八八九年四月五日、「西文小品 幽霊新郎」米国 アルヴキングス・一八八九年四月十日〜二十日（九回）一八八七年一月七日〜十五日（八回）、「衛士」抱一庵主人訳・一八八九年十一月二十五日〜十二月八日（十回）。

9 「仏、曼、二学士の譚」(Les Cinq Cents Millions de la Bégum)、「天外異譚」(Hector Servadac)、「煙波の裏」(Les Forceurs de Blocus)、「盲目使者」(Michel Strogoff)、「大水塊」(Le Pays des Fourmures)、「炭坑秘事」(Les Indes Noires)、「探征隊」(Les Enfants Du Capitaine Grant)の七つ。なお、これらの小説には後に別のタイトルで翻訳が出版されているものもあるが紹介は省略する。

10 『志別土商人の物語』矢野文雄訳述、佐藤乙三郎出版、一八八八年、『志々利譚』小栗貞雄訳、佐藤成文堂、一八八九年、『鉄世界』森田文蔵訳述、集成社、一八八七年（「仏、曼、二学士の譚」の改題）、『瞽使者』上・下、思軒居士刪潤、報知社、一八八八年（「盲目使者」の改題）など。

11 遅塚麗水「森田思軒氏」『文章世界』一九〇六年五月（引用は明治文学全集95『明治少年文学集』筑摩書房、一九七〇年、四四六頁による）。ただし遅塚麗水が報知社に入社したのは一八八九年のことなので、「幻影」掲載時の事情を知らなかった可能性

12 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』（前出）一一八頁。

13 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』（前出）四四五頁。

14 『近代文学研究叢書』第三卷、昭和女子大学光葉会、一九五六年、二〇七頁。

15 一八八八年五月一日に「日本美術取調特派員」という題名の社告が掲載され、九鬼隆一たちの京都・大阪・奈良・滋賀・和歌山における美術調査に森田文蔵（思軒）を特派員として同行させることが告知されている。『郵便報知新聞』がこの調査を重視していたことは、同じ社告が同月三日・五日にも掲載されていることから推測される。

16 思軒居士「奈良より（五月 日発）」一八八八年六月三日（この記事には五月二十六日に奈良で調査グループと合流したとある）、同「奈良の古美術 六月十一日夜奈良客舎に於て」一八八八年六月二十〜二十二日（法隆寺夢殿での救世観音の発見を伝える記事）。

17 「フェノロサ氏の演説」一八八八年六月十五〜十七日。

18 「大和地方美術品の調査済」一八八八年六月二十七日。

19 東京創元社、二〇〇九年。副題は「古典ミステリ研究〜黒岩涙香翻案原典からクイーンまで」。『幻影』の原作者・原作の同定につながる情報を与えてくれたことについて記して感謝に

代えたい。

- 20 『英文学の地下水脈』八九頁（前出）
- 21 『英文学の地下水脈』八五頁（前出）
- 22 『英文学の地下水脈』一〇五頁（前出）
- 23 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』（前出）一二二頁。
- 24 「高嶋石炭坑々夫使用法」一八八八年七月八日、「高嶋炭坑の実況」七月二十二日・二十四日、「二怪報は共に先づ十分の取調を遂く可し」八月十六日、
- 25 「社員派遣社告」一八八八年八月十八日。
- 26 「警保局長の復命書の公示を望む」一八八八年九月六日、「労働社会の状態を改良する方法」九月十九〜二十日。
- 27 「メディアとしての小説——一八九〇年の「飄浮城物語」——」『近畿大学日本語・日本文学』7、二〇〇五年三月。
- 28 「彗星現出」一八八六年十二月五日、「彗星の事」一八八七年五月六日、「彗星現はる」一八八八年六月三十日、「日食に関する心得」一八八八年八月六日・七日・九日、「白光の凶」「日蝕中の気象観測の結果」二十三日、など。
- 29 「万国博覧会出品物買入」一八八七年三月三十日、「西班牙の万国大博覧会」五月二十一日、など。「万国大博覧会延期」五月二十八日、「万国大博覧会の出品物」六月二日、など。
- 30 「東洋大勢論」一八八六年九月十七日〜十九日（三回掲載）、
- 31 「露国の挙動」一八八七年四月九日・十日、「露帝の巡遊」一八八八年十月十六日、など。
- 32 「アヨーブ可汗の後報、露英のアフガン境界論アフガン内乱の鎮定」一八八七年十月十一日。
- 33 「露帝纒かに一糸線の助けに依て其危難を免る」一八八七年五月四日、「露国の不穩」二十一日、「埃利亜の内勢と東欧の革命党」一八八八年七月四日、「虚無党の捕縛」二十一日、など。
- 34 「国事犯の公訴状」一八八八年五月二十七日、「国事犯公判の景況」六月二日、以後裁判の進行に伴って継続的に公判の記録・記事を載せ、また再審関連でも「国事犯事件の公判」一八八八年七月六日、「大井憲太郎氏等上告事件」二十九日、といった記事が掲載される。
- 35 「金玉均氏北海道に移転す」一八八八年七月三十一日、「金玉均氏札幌に着す」八月十一日、など。
- 36 付け加えると、一八一七年のイギリスを舞台にした「夢中夢」では「最も詭激を極めたる革命党」のメンバーが登場し、小説の結末で危うく「国事犯」として逮捕されるところを免れる。
- 37 石橋正孝「編集者 ピエールIIジュール・エツツエルと《驚異の旅》」『水声通信 no.27』（特集ジュール・ヴェルヌ）二〇〇八年二／三月号、一三九頁。
- 38 「万国博覧会出品物買入」一八八七年三月三十日、「西班牙の万国大博覧会」五月二十一日、など。「万国大博覧会延期」五月二十八日、「万国大博覧会の出品物」六月二日、など。
- 39 「東洋大勢論」一八八六年九月十七日〜十九日（三回掲載）、

九月十六日の初回に付された序文による。なお、初回だけ題名が「航回記要」となっているが、誤植と判断して「回航記要」で統一した。

38 一八八七年二月一日に同時に掲載されて以降は五月十日と八月七日の例外を除いて「報知叢談」が掲載されていない期間に「西洋風俗記」が掲載されるというサイクルになっている。

39 「西洋風俗記」一八八六年九月十六日。

40 「問 芝居しばいの事は一応大略たいりやくを承りうけたましが尚ほな詳細しやうさいの摸様もやうは如何」（原文はふりがなが左側）一八八七年二月三日から一八八七年二月二十日（「問 其統は如何」）まで八回分。

41 一八八七年二月十三日～三月二十日。十二回掲載。

42 一八八七年二月十五日～三月十八日。二十二回掲載。

43 「メディアとしての小説」（前出）。

44 矢野龍溪「浮城物語立案の始末」『郵便報知新聞』一八九〇年六月二十八日～七月一日。引用は『明治文学全集15 矢野龍溪集』三六七頁による。

45 「エンサイクロペディアとしての小説——幸田露伴と「浮城物語」論争——」『近畿大学日本語・日本文学』6、二〇〇四年三月、六一頁。

46 「難民・亡命者の位置 明治期の政治小説から見えてくるもの」『述』（近畿大学国際人文科学研究紀要）2、二〇〇八年

六月、一二八頁。

47 「西洋風俗記」一八八六年九月十六日。

48 「難民・亡命者の位置 明治期の政治小説から見えてくるもの」（前出）。